

福祉施設職員の心的体験

子どもとのかかわりに焦点を当てて

Mental experience of the child welfare institution staff

水野 あゆみ

Mizuno Ayumi

立命館大学応用人間科学研究科

Ritsumeikan University Graduate School of Science for Human Services

Key words: 児童福祉施設職員, 子どもとのかかわり

問題

児童養護施設は、多様なニーズを持つ児童の生活の場であるため、施設の機能は児童らと生活をともにする職員の高い専門性に支えられているといえる(神田・森本・稲田, 2009)。職員が施設に長く勤めることは、児童の権利擁護の観点からも非常に重要な問題であるといえ、職員の勤続年数が短くなると困難な条件下で働いているベテラン職員をよりいっそう追い込むことになり、このことがひいては不適切な処遇あるいは施設内虐待等、施設における子どもの人権侵害のリスクを高めてしまう可能性がある(神田ら, 2009)。

また、トラウマを被った被虐待児に対応する児童養護施設職員の共感疲労は高く、共感疲労が高い職員には被虐待児との関係が不安定なものが多いことが明らかにされている。

児童養護施設において職員は子どもにとってかかわりの対象であると同時に、環境でもある。職員は日々の生活を支え、養護してくれている存在である。児童養護施設には家庭で生活することのできなくなった児童たちが生活している。被虐待児も多い。そのような状況の中、信頼できるようになった職員が困難さを感じていたり、やめてしまったりすることは、子どもにとって再び傷つくことにつながってしまうのではないかと考えられる。高崎(2011)は子どもたちの発達にはデプリヴェーション体験の後、彼らがいかなる関係性を他者との間に築いていくかによって大きく左右されるため、子どもが家庭から切り離された後の継続的なかかわりこそ、彼らの支援において重要となると指摘している。

対人援助職における心的疲労の先行研究から児童養護施設職員にも当てはまると考えられることをいくつか整理しておきたい。

古屋(2006)はケアの視点から対人援助職者の心的疲労にかかわる特性は、以下の2点に見ることができるとしている。①ケアは相手の人格にかかわっていく行為である。②仕事の成果を相手に依存せざるをえない。

また、辛い体験を見たり聞いたりすることにより二次的なショックを受けることがある。災害の悲惨な現場を

見る救命士や警察官、クライアントの辛い体験に共感的に耳を傾ける対人援助職独特の心的疲労であるといえる。さらに、そこで体験したこと、聞いたことを関係者以外には話しにくく、孤立感を覚えやすいことも心的疲労につながる。また関係者の中でそれらを話す機会が少ない職場では疲労の度合いは高くなるのではないかと考えられる。

目的

本研究では、子どもとのかかわりにおいてどのような体験をしているのか、それについてどのように対応しているのか、また、職員として仕事をしていく中で、考え方、感じ方、対処法などにどのような変化があるのかについて調査したい。その際に、目の前で起こる一つ一つの困難なことをどのように体験し統合しているのかという過程と、職員として働き続けるうえで長期的にみてどのように体験し統合しているのかという2つの次元でそれぞれが螺旋構造のように体験、統合されているのではないかと考え進めていく。

方法

対象 児童養護施設で働く職員

手続き インタビュー調査を行う。

子どもとのかかわりにおける具体的なエピソードを語ってもらい、子どもとの関わりにおいてどのような心的体験をしているのかを考察していく。

参考文献

- 古屋 佳子(2006). 対人援助職者の身体知とバーンアウト症候群について—個人固有の〈職業の意味〉とメイヤロフの〈了解性〉に関する検討からの考察—。京都市立看護短期大学紀要, 31, 113-123.
- 神田 有希恵・森本 寛訓・稲田 正文(2009) 児童養護施設職員の施設内体験と感情状態—勤続年数による検討—。川崎医療福祉学会誌, 19 (1), 35-45.
- 高崎 菜穂子(2011). ある児童養護施設職員の語りのKJ法による分析: テクストの重層化プロセスからとらえる実践へのまなざし。京都大学大学院教育学研究科紀要, 57, 393-405.